

# 『ホース・フレンズ事務局』立ち上げの経緯と今後のあゆみ

平成 19 年 5 月 吉日

～ホース・フレンズ枚方セラピー牧場開設までの軌跡～

内閣府 NPO 法人ホース・フレンズ事務局

理事長 芦内 裕実

馬を使った心身への回復効果は、古代ギリシャの時代から認められています。ドイツでは、乗馬療法として健康保険が使えるくらい馬が医療にも用いられています。馬が人の心と身体に良いという事実が、どうして世の中に広がらないのだろうかという個人の思いから活動が始まり、組織づくりを始めました。自分ひとりでいくら頑張ったとしても、出来ることはたかがしれています。それよりも同じ考えや目標に向かう同志や仲間たちと気持ちを一つにして、物事に取り組んだ方が何倍も大きな力や意外な楽しい結果を出すことが出来ます。その心の相乗効果は、現実の壁を越えた奇跡を生み出すことが出来ると思うのです。『大きな夢を皆で分かち合う喜び』それを馬事業界という特殊な世界を超えて、一般社会に根づかせる活動を馬と一緒にやる場がNPO法人ホース・フレンズ事務局です。活動に欠かせない各分野のスペシャリストの賛同やボランティアで活動して下さる方々のご支援をいただき、ホース・フレンズ活動は関わるすべての方々と一緒に歩み始めました。2007年5月26日にオープンを迎える『ホース・フレンズ枚方セラピー牧場』が、スポンサー企業ならびにご支援いただく全ての方々の目に見えた社会貢献活動の場となりスタートします。一層のお力添えを元に行政・企業・マスコミと連動した取り組みで、ホースセラピー(Horse Assisted Therapy)の研究・普及活動が広がり、馬の持つ効果が日常の身近なものとなり、一人でも多くの人々の癒しと自信回復につながっていくことを心より願っています。

ホース・フレンズ事務局活動は、自ら馬が人を癒す不思議な力を体験し、日常生活に根ざした人と馬との関係が作れないものかという思いから、平成16年4月12日に内閣府に籍を置くNPO法人としてホース・フレンズ事務局を設立しました。正式名称は、『特定非営利活動法人ホース・フレンズ事務局』という長い名称ですが、名称にあえて『事務局』をつけたのは、乗馬クラブでは馬の厩務作業や調教、営業活動に追われ、馬との感動体験を記録しておく余裕がない、その部分を情報共有し、それぞれの素晴らしい活動を体系化し、フィードバックする乗馬施設の支援機能として組織化すれば、もっと馬と人の感動のドラマが集まるのではないかと考えました。『ホース・フレンズ事務局』は、その機能にこだわった名称であります。

2002年の活動のはじめは、十数年所属していた乗馬クラブの懐を借りて個人の活動をおこないました。既に大阪府豊中市教育委員会の不登校児童に乗馬体験を提供していた服部緑地乗馬センターで活動をスタートできたことや関西福祉科学大学教授(大阪府立大学医学部 CEO)の倉恒弘彦医師との乗馬を通じた出会いで、2005(平成17)年から厚生労働省の馬介在療法の臨床研究に関わることができ、活動をスタートさせる環



境に恵まれていました。臨床研究の当初から被験者の協力を得ていた単位制の向陽台高校が、ホースセラピーの研究を行なったことで、2006年秋から服部緑地乗馬センターで、乗馬がスポーツとしての授業に加わることにもなりました。

乗馬スタイルが違えば調教方法も異なり、当時ほとんど交流がなかったウエスタンとブリティッシュの乗馬クラブ。ウエスタン馬をブリティッシュの乗馬クラブに入厩させたことも前代未聞と言われましたが、阿蘇市の夢☆大地グリーンバレー（後にホース・フレンズ事務局の西日本支局）と服部緑地乗馬センターの竹野所長のホースマンシップを持つ両者のご好意で2度に渡ってセラピーホースのデモンストレーションを実現することができました。

日本では、『馬』から連想することは、多くの人が“競馬”とか“乗馬”というイメージになるようです。その以前の“馬そのもの”の魅力や性質を知ることは、乗馬クラブでも容易い事ではありません。馬と人との関係の原点を見つめたホースセラピーが、気持ちを寄せてもらえるやり方で、気軽に馬と関わりを持ってもらえるしくみが大きな市場を作るきっかけになると思いました。乗馬というマーケットが小さい根本原因を考え、馬との関わりが少ない人々に気軽に乗馬クラブを訪れてもらうようにして、馬に出会える仕組みを作り、馬の魅力を知ってもらえれば、体験した多くの人が馬のいる乗馬クラブに通いたくなるだろう。乗馬技術を身につけるだけの場所ではなく、馬の本来の魅力や効果に出会えるところから乗馬に関心を持つことによって、乗馬人口を増やすことができるので、乗馬クラブへの貢献になると思いました。既に馬とふれあう素晴らしい活動をしている乗馬クラブはありましたが、情報交流が少ない中でその良さが広がりにくい状態も改善できればと強く思いました。また、馬を持たず、馬を借りる費用を乗馬クラブに還元できることで、乗馬クラブの協力が得られる。ホースセラピーが乗馬技術を学ぶ乗馬クラブとの住み分けも可能になる。乗馬クラブの架け橋のような機能としての役割になって、本当の馬の癒しと感動を体験して欲しいという願いから活動をスタートしました。

馬の純粋さとふれあう活動は、非営利団体でおこない、敷居の高い「乗馬」のイメージから気軽に誰もが馬と触れ合えるようにすることが適切であると思います。公平に楽しめる活動にするには、個人の利益が目的で活動を利用しようとする人や第三者的な評論家は必要ありません。メンタルに働きかける馬の特性を心に問題を抱える「不登校・ひきこもり・ニート」を中心に、なぜ馬がいいのかという科学的な検証をおこない、世界中で昔から人との深い関係を築いている馬と一緒に社会に役立つ活動として、行政の取り組みに協力できる内閣府に籍を置くNPO法人の組織を作りました。近年、心を見失った恐ろしい事件が相次ぎ、安全な外遊び環境が脅かされ、子どもの健全な教育の低下



に拍車をかけます。馬のいる地域交流の安全なアウトドア環境教育の一環として、地球規模のテーマである自然環境問題にも関わりを持って活動していきたいと思えます。非営利として、運営費を捻出していく工夫と努力は相当のエネルギーを要しますが、様々な人の能力と時間と思いやりの心をボランティアしてもらうことで、地位や肩書きを越えた人との交流の中で、まったく新しいものを生み出すことを活動の基盤としていきたいと思えます。不思議と活動の関係者の関連事業が拡大するのは、その異業種の意外な組み合わせや刺激がもたらす相乗効果ではないかと思えます。そして、また馬が人を連れてくる素敵な活動に広がります。理事には、社会的地位の肩書きとアドバイスをボランティアしていただき、スタッフには運営のボランティアとして助けていただき、そして実活動ボランティアの皆さんにもホースセラピーの市場づくりのご協力を頂きながら、関わる皆さんと一緒に大きく言えば日本の馬文化の幕明けを見たいと思えます。

馬を介在させた活動の中にも身体障害者を対象としたリハビリ効果を目指す障害者乗馬でも、療法として取り組んでいる施設やスポーツ志向など様々な特色があります。ホース・フレンズ事務局のようなメンタルヘルスケア(不登校・ひきこもり・ニート)への研究活動など主たる領域別の活動を登録し、馬の効果を公正公平な水先案内が出来る機能も必要だと思えます。それぞれの団体が小さなプライドを捨てて大きな夢を分かち合う活動によって、またそれぞれの広がり生まれると思うのです。そのための国の支援を得て活動をおこなうのに適した団体の組織づくりが急がれます。

乗馬を始める少し前、ドイツへ家族旅行の際に、ヒポセラピー(医療としての乗馬)の存在に出会っていたこともあり、日本でのホースセラピーは、馬事の大きな世界ではなく身近かに馬を愛する人が増えて市場が広がるという、馬と人のシンプルな関係をどう伝えていくかに焦点を当てて考えました。国内で乗馬技術を身につけるまでの道のりを考えると肉体的・精神的・経済的に乗り越えられる限られた条件を持つ人しか乗馬を継続できない。馬を一人で乗りこなせるレベルの日本の乗馬人口は、5万人程度と言われています。その小さなマーケットを広げていくには、地道な活動だけではなく、行政・企業・マスメディアの連携が必須で、第一段階の取組みはそのことに終始しました。

馬は、人や様々な出会いを運んできてくれます。この活動を始めることによって、生涯ご縁のなかったであろう人物や業界に出会えることになりました。今まで携わった仕事が活動にすべて生きていることも嬉しいことです。生活者と企業のパイプ役として、マーケティングを学んだこと。企業から見て使える NPO 団体になるために企業イメージアップに耐え得るクリエイティブワークや企業提案書づくり、ある程度のプレゼンテーション



力を身につけていたことも全て感謝です。そして通信のしくみを学んだことで、共通番号のフリーダイヤルを使って、電話番号の告知を一本化し、電話をかけた人の地域の最寄の支局につながり、電話の本数や話中時間も知る事ができる全国組織を目指した組織管理を当初からイメージできたことも、前職の経験のお陰だと思えます。驚いたことにフリーダイヤルの電話とファクシミリの番号が見事な組み合わせになったことです。TEL:0120-372403 みんなにホース、FAX:0120-403372 ホースみんなに！この番号が取れたとき、この事業へ進めという天の声が聞こえたようでした。この番号にちなんで、毎年4月3日はホースセラピーの日と定め、子どもたちにポニー騎乗1周無料を乗馬クラブに協力を得て活動をしています。

ホース・フレンズ活動をスタートさせるきっかけになったのは、2000年2月から7ヶ月間の結核病療養中に経験した馬から与えられた心理的効果に興味を持ったことです。趣味の乗馬を十数年楽しんできましたが、病気によって仕事ができない不安から社会からの断絶感を味わい、一時は人が大勢いるところを想像するだけで体調が悪くなり電車にも乗れない状態に陥りました。家族の帰りの時間が連絡より10分でも遅いと不安だったり、振り返ると『ひきこもりの心理状態』は、こんな感じなのかなと想像します。人間関係の葛藤や長いトンネルの中から抜ける事のできない苦しみは、自分の存在を否定してしまうほど無気力になります。人は本当にもろい生き物であると思えます。辛い気持ちや目の前が真っ暗になったり、そんな経験を味わった人こそ、小さな喜びに気づくことが出来ると思います。夜空は真っ暗になるほど、小さな星の輝きが見えます。日々の生活で、見えなくなってしまったものや自然の一部である人間が忘れてしまった環境を取り戻し、自己回復できる場所があれば……。自然環境の中に馬が居て、笑顔や温かい気持ちに触れる癒しと感動の場所。ホースセラピー牧場のような、そこに行くだけで自分の内在する自然と調和できるやさしい自分の居場所ができたならと夢が膨らみました。

療養中、馬に会いに所属の乗馬クラブへ足を運んでいたある日、洗い場に繋がれていた馬の頸に思わず抱きつきたくなくて腕を回してしがみついたら、その温もりが心の中に入り込んできて熱い涙が溢れ出ました。馬から離れると馬の顔が私を覗き込むように見て、大丈夫、大丈夫と馬が私の腕をペロペロなめてくれたのです。今までスポーツとして、障害馬術でストレスを発散していた時とは全く別の感覚を体験しました。しかし、不思議なことにその馬の名前を知りたいとスタッフを探して戻ると繋がれていた洗い場には、もうその馬(鹿毛)の姿はなかったのです。私にとって衝撃的な体験で、それ以来馬に癒されるのはどういう作用があるのかを知りたいと思いはじめました。そして、この効



果をストレス社会で活かせる仕組みが必要だと考えて、仕事に復帰後 2001 年に入ってから、にわかにホースセラピーへの思いを募らせていきました。それ以降、自分の体験した心理的現象に興味湧き、ひきこもりに関する後援会やシンポジウムに多く参加しました。外に出て社会で働くより餓死する方を選ぶという考えの人が多きことの現実にショックを受け、働いて税金を納められない人々がこんなにもいるなんて日本沈没だと愕然としました。高度経済成長期に社会が生み出してしまった人と環境への歪の結果『ひきこもりの心理状態』に追い込まれた人々に馬の魅力を知ってもらえれば、少しでも救われる人がいるのではないかと思いました。そして、高級な明るいイメージの馬から発信することで、社会から閉ざされたイメージのひきこもり問題に目を向けてもらい、この現実を多くの人に関心を持ってもらいたいと思いました。

それからは、気持ちがまっしぐらに馬との関わりについて本やインターネット、馬事関係者からあらゆることを学びました。組織づくりに女性の社会的地位の低さが弊害にならない方法とその組織を社会に認知してもらえるように、ホースセラピーの研究と普及活動に必要な国内で第一人者にアタックしてみました。東京大学の林良博教授(前副学長)にダイレクトに電話をし、そこで農学部の局博一教授に馬の研究を委ねられたことを聞き、局博一教授に不登校ひきこもりに特化したホースセラピー活動の主旨を述べたところ賛同が得られました。企画書を送り、そして東大の研究室を訪ねました。不登校の子どもたちと 30 年間生活をしている臨床心理士で獣医師の登校拒否文化医学研究所所長の高橋良臣先生をはじめ関西福祉科学大学教授で大阪市立大学医学部教授で、国公立で初めて疲労外来を立ち上げられた倉恒弘彦先生、馬との関わりで不登校生を社会復帰させ、文化功労賞を受けられた夢☆大地グリーンバレーのオーナーで調教師の梅木康裕氏、言語聴覚士で自閉症児への乗馬療育を行なう七野友子氏、組織づくりには船井総研顧問の大浦章一氏など活動に必要なスペシャリスト 13 名が理事に参画していただくことになりました。

ブリティッシュの乗馬を共に楽しむ仲間とウエスタン乗馬での楽しみも経験し、大いに乗馬ライフを楽しんでいましたが、その頃乗馬スタイルの違いで高い垣根がありました。格好よく馬に乗るブリティッシュ乗馬とカウボーイを連想するウエスタン乗馬はほとんど交流を行なわない世界でしたが、それぞれに楽しく素敵な乗馬の世界をもっと情報交換して融合できないものかと思いながらスポーツとしての乗馬を楽しんでいました。その頃、ぼんやり思っていたことが、馬からのセラピーを受けてから乗馬スタイルを決める前の段階で気軽に馬とふれあえる、観光牧場的なものではなく、人にとってどのようにいいのか科学的な根拠を元に、馬にとってもストレスの少ない活動の場所があってもいい



のではないかと考えるようになりました。敷居の高いイメージの乗馬クラブでも中に入ってみれば、自然の環境の中でのんびりとした馬時間が楽しめます。馬に乗るだけではなく、エサをあげたり、馬の手入れや馬房掃除、たてがみの三つ網、夏は馬を丸洗いしたり、馬場を囲うラチのペンキを塗り替えたり、ニンジン畑を作ったりなど、馬の周辺で費用のかからない遊びがたくさん出来ます。乗馬クラブでは重労働となる厩務作業が、子どもたちは目をキラキラ輝かせて手伝ってくれます。廃棄処分になっていたサビた蹄鉄を“蹄鉄磨き”としてプログラムに取り入れて、幸運を呼ぶ蹄鉄に願いを込めて、その願いに向って努力する教育に発展させました。プレゼントでもらえる蹄鉄から馬を知って、身近かに馬あそびを体験してもらえんと思いました。新たなホースセラピー事業として、気軽に訪れることのできる乗馬クラブに変身して、馬との関わり喜びの中から固定経費である馬とスタッフを活かせるホースセラピー活動を提供することで、馬事普及と社会への貢献ができる。こんなに素晴らしい馬活動に出会えたことに心から感動しました。

2002年に入り、馬の力を知れば知るほど、馬と人との関係をつなぐ馬に到達するまでのコミュニケーションのとれる人材の確保が必要と考え、ホースセラピーの効果を最大限に発揮する知識と経験を持って活動をおこなう「ホースセラピスト」を養成することから始めようと思いました。『馬に癒され、人を癒せる人になる』というキャッチコピーを作り、心理学・馬学・乗馬生理学・コミュニケーション学習・人の心に寄り添える馬づくりを学ぶホースセラピスト講座をスタートさせました。自分に何が出来て、今何が役立つのかを感じられる人たちを育成し、社会(企業)が求める人材の宝庫を作りたいと思いました。馬を通じて雇用の場をつくり、社会に貢献する気持ちやボランティア精神を養いたいと思っています。馬はコミュニケーション能力や危機管理、マネージメント能力も養えます。企業や社会で役立つ人を育てるのがホースセラピストです。認定ホースセラピストがオリンピック選手のように、企業に席を置いて、半分は企業の仕事をして、もう半分を企業がメセナ的な活動としてホースセラピーの活動に送り込むようになること。それが私の夢です。その講座を通じて出会った馬を愛する多くの人々の感動体験を活動の原動力として、未知のホースセラピーの市場づくりに本格的な活動を始めました。

療養中に人生観が180度変わってしまったこともあり、生活をするための仕事より自分の人生を生きるための活動への思いが募り、復帰後1年余りで17年勤めたマーケティング会社の専務に正社員から嘱託社員への申し出をしました。そこでホースセラピーへの夢を語ったところ、社会貢献活動としてオフィスを提供してもらいながら、支援を続けていただきました。その後、以前ある中小企業の社長のプレゼン資料を作成するボランティアがきっかけで、株式会社でホースセラピーの活動をという話が舞い込んできました



た。結局まだ市場のないホースセラピー活動で営利事業としての採算が取れず、結局スタートが切れない状態で中途挫折しました。

個人の活動をスタートさせて2年後の2003年4月に内閣府の認証を取得し、本格的に活動に打ち込む必然性を感じ、ホース・フレンズ事務局活動に専念することになりました。間借りしていた前オフィスも業務を拡大するため、スペース確保が難しくなってきた為、事務局を自宅の大正区に移しました。しかし、あてにしていた行政支援金の話が途絶え、活動をおこなう運営費として注ぎ込んできた給与も使い果たし、結局愛車を売却し少ない貯えも底をつき、家族のお世話にならざるを得なくなりました。行政書士に支払う経費も抑えるため、法務局へ日参し登記申請も自分で行いました。女性の社会的信頼度の低さやボランティアの認識の違いなどNPO 法人運営の難しさを心底から味わいました。果てしない道を耕すには、予測できない出来事の連続です。『今日の最善は、明日の最善になるとは限らない』と日々反省、日々改善に臨みつつ、慌しく翌日を迎えます。見えない失敗が待ち構えているのなら100の失敗を早く経験したいと思いながら、余裕のない毎日が過ぎて行きました。自分の自由に使える時間と知識と思いやりをボランティアで関わり、ホースセラピストの雇用の場を作るホースセラピーの市場が熟すのを待つには、10年あっても難しいと思いました。それならマスメディアを使って、市場作りから始めよう。行政・企業・マスメディアの連携なくして、新しい市場づくりは出来ないと考え、思いつく限りの企業メリットを企画し、本職の提案活動を実行して行きました。

寄付や協賛を求めるためには、まず相手にとってのメリットとなることを考えること。情報を結びつけるだけで、新しい事業を展開することが出来たり、今まで培った経験は大いに役立ちましたが、あらゆるツール作り、電話応対、郵送手配に明け暮れ、睡眠不足、ストレスから精神的なダメージが続き、帯状疱疹を引き起こし、体力的な限界も感じながら、それでも短期間勝負とわが身にムチを入れながらの日々が続きました。苦しみの中から自分を突き動かす原動力になったのは、ホースセラピーを事業化しようと思ったときからの夢でもあった、母校の小学校に馬を連れて行くことができた時に出会った馬と触れ合った子どもたちの驚きの表情と笑顔でした。私にとってのインパクトあるその感動の記憶が、無慈悲な人たちからの言動に救われることにもなりました。また、立ち上げの苦しい時、これを実現できたのは、所属先の乗馬クラブ服部緑地乗馬センターの竹野所長の懐の深さとボランティアで協力してくださった方々のお陰と本当に感謝しています。

そして、振り返って思うことは運営資金が困難であれば知恵と工夫が生まれ、人の温



かさを受け取れることができ、皆で創り上げる喜びを体験できます。評論家やお手並み拝見とする傍観者と関わる余裕がなかったことも活動を推進していくことに吉となりました。馬は広い自然環境の中でしか生きられない。馬とすることで、自分が自然の一部であるということもよくわかります。自力で生きていける人間より飼われている馬を優先して運営を考えざるを得ません。飼われている馬は、大きいがゆえに人間が世話をしあげないと死んでしまいます。また大きな動きに人間が対応していく術を身に付けることができます。馬を通して生きるということや様々なことを学びます。大きな馬の存在が今の人間社会で見えなくなっているものに気づかせてくれることを感じます。

2005 年に入り、地道な活動の支援スポンサーのご理解とご協力のお陰で、安心して活動に関わってくださる人が増えました。しかし、NPOだからと言って、粗末な印刷物では企業のイメージを損なってしまいます。クリエイティブを重視すれば、運営が順調に見えるのですが、まだ市場のないホースセラピーを普及していくには、相当の活動をこなして行かなければなりません。NPO という非営利団体運営の難しさも逆に支えてくださる多くの人々と馬たちに守られて、ホースセラピーが大阪府教育委員会の後援をいただき、府内に約 40 数箇所ある適応指導教室の学校に通えない不登校の子どもにも馬とのふれあいプログラム参加も登校に換算してもらえるようになりました。教師の理解浸透に時間をかけながら、服部緑地乗馬センター以外にも大阪乗馬協会や神戸乗馬倶楽部など、ホースセラピー普及・研究活動への協力を得られる乗馬クラブも増えてきましたが、生活を守る仕事とNPO活動の両立の厳しい日々は続きます。新たな市場づくりは、初めて経験することの連続で、誤解や失敗がつき纏います。これも進化の途上と思いき直して、まもなく出会う人と馬の素晴らしい感動体験の多くの笑顔を待つことで、毎日の一歩を踏み出します。

同年 10 月からは、OBC ラジオ大阪の番組で『ホースフレンズ～ライフ・イズ・ビューティフル～』という毎週土曜日の正午まで 15 分間のレギュラー番組を持つことが出来ました。メディアを通じた社会活動をテーマにした番組づくりをちょうど考えていたタイミングの良い出会いでした。ストレス社会に、馬は特効薬であると活動を重ねるごとにつくづく感じます。その馬の効果を地域交流の媒体として、馬からつながる教育、福祉、環境問題など様々な社会テーマに踏み込んで、これからも番組でお伝えしていきたいと思っています。人間と同じ大きな生命から学ぶもの。馬が持つ人への心身回復効果や馬体の美しさ、危機管理、ボロ(馬糞)は優良な堆肥になり、ゴミを出さず自然環境の中に生きて人工の中に生活する我々に馬は問いかけます。そして、活動の原点となるボランティア精神は、役立つ自分を活かす力を育て、社会で求められる素晴らしい人材の宝庫にな



ります。雇用の場づくりもホース・フレンズ活動の大きな柱です。コミュニケーション力、判断力、企画力、危機管理能力を備えたホースセラピストは、企業が求める人材そのものであると思います。近い将来、オリンピック選手のように企業に籍を置いたホースセラピストが、ホース・フレンズ活動における「教育・福祉・環境支援」の社会貢献の一環として活動に参加していただきたいと思います。

2006年4月、医療・バイオ・心理におけるエキスパートを育てる専門学校で、医療福祉心理学科の2年生にアニマルセラピー講座として、ホースセラピスト育成カリキュラムを採用していただけることになりました。ほとんど馬に触れたこともない生徒35名。関わる講師陣も手探りで授業を進めています。心理という学問を目指す生徒へのホースセラピーが、自分主体に留まらず、ストレス社会における人々への本物の癒しにつないでくれることを願っています。

同年7月、馬と人との関係の原点であるホースセラピーをテーマにした命を伝える劇映画『風のダドゥ』が、角川ヘラルド映画の配給で全国ロードショーとなりました。既にセラピーに適した馬を使って、不登校の子どもたちを社会復帰させていた阿蘇市のホース・フレンズ事務局西日本支局の夢☆大地グリーンバレーがロケの舞台となりました。一部の地域で映画館上映を行いました。心をつないで行く運動として自主上映をおこなう思いが広がり、2006年7月には東京大学の局教授と共に全国上映運動をスタートしました。“風のダドゥを広める会”を発足させ文部科学省から全国の教育関係者にメールマガジンを発信していただくことが出来ました。ホース・フレンズ活動を「心をつなぐ地域運動」と位置づけ、大阪から全国の皆様へ発信し、多くの賛同者が得られました。11月11日には、大阪府教育委員会主催の「心の再生」フォーラムで、谷村新司さんの「ことばのライブ」に続いて、「風のダドゥ」上映で、心のあり方を考えます。心を大切に作る時代に入り、日本における新しい馬文化の始まりを予感します。映画のキャスティングもまた素晴らしく、榎木孝明さん、勝野洋さん、萬田久子さん、井上晴美さん、犬塚弘さんはじめ中田新一監督の思い入れの伝わる癒しと感動の素晴らしい作品です。競馬引退後4ヶ月の調教で、演技をする馬に仕上がったことも大いなる感動です。この映画のキャッチコピーとなった『馬に癒され人を癒せる人になりたい』というホース・フレンズの活動テーマを採用していただきました。また映画の世界も馬事業界と同じくらい特殊で、一人でも多くの人に関わって、協力がなければ全く広がらない分野の事業であることも深く学びました。ホース・フレンズ活動は、あくまでも人の想いのつながりでこの活動が支えられています。馬の文化・触れ合いの会を作り、映画館での上映後も『風のダドゥ』を支援し、地域の自主上映を続けて行きます。日本にも身近かな馬との暮らしが実現で



きる可能性にますます期待が広がります。懸念するのは、馬がいればホースセラピーと称して馬と人に配慮なく活動をおこなう団体です。事故の危険性も考えて、ホースセラピーを行なうために適した乗馬施設を登録制にし、東京大学局教授の研究室に事務局を置く、「ホースセラピスト認定委員会」がその認定の基準を設けることになりました。安全で楽しい活動が広がっていくための認定乗馬クラブ制度を設けることによって、馬を愛する人々の意見交換の場として、また認定資格を持ったホースセラピストが社会で活躍できるスタートとしても大いに期待しています。

そして2006年秋、大阪・京都・奈良をつなぐ大阪府枚方市・交野市エリアにホースセラピー牧場づくりを始めます。馬と過ごす街づくりの一環として、緑豊かな場所に独自の牧場を開設する計画が持ち上がりました。馬という大きな生命を預かることの決心までには、構想から3年以上の歳月が必要でした。不登校からつながるニート問題にも行政の取組みとして、ホースセラピストの活躍が積極的に行なえて、目の届く広さの馬と過ごす場所が必要になりました。

非日常の馬をその地域に入れることの弊害やまとまった土地の広さと環境を確保するための行政への根回しや挫折も経験しながら、特急電車の停車駅『枚方市駅』から徒歩5分という日常の生活圏に馬と過ごす癒しの空間が誕生します。枚方市が平成6年から眠っていた遊休地を行政財産の確保を命題に一般公募をおこなった2000坪の土地があります。この土地の使用期間はわずか2年半。一般企業としても条件が厳しく、応募者がなかったため、市民のためになる活用方法を議会で再検討されます。ホース・フレンズは、ヒマラヤ杉や大木を生かした『ホース・ガーデン・セラピー』というコンセプトで応募しました。このコンセプトに朝日新聞のスクープやNHK放送からの取材依頼もあり、注目のセラピー牧場に子どもたちや高齢者の笑顔を一日も早く受け入れたいと願います。“地域社会の未来づくり”というテーマの中で、馬と人との関係がストレス社会の特効薬として、各地に広がっていくことを願ってやみません。ホース・フレンズ活動が、関わるすべての人々の居場所となるよう運営を続けて行きたいと思えます。

この牧場には、餌のニンジンを作ったり、ハーブを育てたり、そして「朝起きポニーの会」では、馬のお世話をして、子どもたちが牧場で朝食を食べて学校へ行く。最近、給食を朝昼兼用にしている子どもたちが増えていると聞きます。気力と体力に欠かせない食育は、成長期の子どもには重要な生活習慣となります。暮らしの中に馬と人が溶け込み、身近かで守られた地域社会における安全な居場所。隣接する関西医科大学病院の協力もあり、広大な淀川の河川敷の広がる環境で、病気療養中に思い描いていたホー



ス・フレンズ牧場構想の乗馬クラブへ行く以前の乗馬スタイルも関係なく馬と触れあえる、本来の馬とのふれあいの場所がまもなく実現しようとしています。既に乗馬療育を取り入れた知的障害者通所授産施設「セルプわらしべ」とのスタッフの連携もあり、全国からホースセラピーのモデル牧場として、期待が寄せられています。

枚方セラピー牧場の入厩馬たちは、鳥取県の岸田牧場で十分な愛情を受けて育った姉弟ポニー2頭と映画『風のダドゥ』に登場した演技する馬“ゼンノカシュー”も熊本県阿蘇市にある夢☆大地グリーンバレーから枚方セラピー牧場オープンに向けて2007年5月21日に入厩予定です。馬と人の心地よさを追求して手作り牧場を目指します。この手作り牧場は、ストレスの多い人間社会で、馬を通じて心と体のバランスを取り戻すためのお世話人ホースセラピストの育成が牧場運営のキーになります。牧場オープンすぐは、ホースセラピストの育成に力を注ぎたいと思っています。共に学びあう“共育”の場所として、人に傷つき不安な社会の中で、人が力を合わせ動植物、命あるすべてのものを尊重し、大事にする気持ちを育むホースセラピー牧場で、安全に外遊びのできる笑顔いっぱいの子どもたちや大人が楽しく時間を共有できる癒しの場となることを願ってやみません。

『HIKKY&NEETS (ひきこもりとニート支援)プロジェクト』も2006年夏の枚方エリアの牧場づくりと共にスタートする計画をしています。国や企業の助成金申請のお手伝いをさせていただくアルバイト(上限付きで得られた助成金の1割を支払う)の募集企画です。不登校からニートへの道を歩む前に馬との関わりによって、臆病さを慎重さに変化させて、潜在能力を開花することのできる、引きこもりやニートの心理的特色を活かした仕事を見出すきっかけになり、自分と向き合うことができればと思います。

ホース・フレンズ活動を通じて学んだ生命科学の原点から、生命は地球上に誕生してから四十億年も受け継がれ、人間は粒子で出来ていて宇宙の粒子と一続きになっている。人間が育んできた生命を今、馬を通して向き合うことができると思います。

人間が生み出した地球規模の歪みから世界規模で自然の脅威にさらされながら、あらゆるストレスを抱えて毎日皆生きています。その歪みに気づいて、知恵ある人間が手を繋いでいく時代でもあると思います。馬がその役目を果たせることが、本当に素晴らしいことと思います。馬からの恵みをもらって、同じ空気を得て生きている誰もが平等で楽しめる活動こそが、歪みの多い社会を蘇らせる大きなうねりになると信じています。

今も運営の辛さは変わりませんが、かけがえのない大切な人々と共に、これからも人

## Horse Assisted Therapy

への心身回復効果を目指し、人が幸せで楽しい時間を共有することのできるホースセラピーで、活動の進化を楽しみながら、馬の安全性と人の安心を基本にした活動の啓蒙を続けて行きたいと思います。

これまでホース・フレンズ活動を支えていただいた多くのボランティアの皆さん、運営を支えるボランティアスタッフ、理事、団体・企業、そして家族、その他個人の多くの皆様にこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。そして、これからもどうか倍旧のお力添えをいただけますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

活動を通じて思います。あらゆる人が、自然の中で馬と過ごす時間の中から本当の癒しに気づくことができるのではないのでしょうか。

HORSE-FRIENDS\* NPO

理事長 芦内 裕実

